

2030年

日本の展望

私の長期ビジョン構想

《6》



濱田 純一・東京大学総長

意識改革の先に日本の未来がある

アベノミクスの影響もあってか、日本は経済のみならず、個人の意識面でも伸びやかさが出てくる等、薄目が差し始めている。しかし、ここで気を緩めてはいけない。少子高齢化や財政赤字、エネルギー問題等、日本が根本的に抱える危機を克服するためには、諸般のシステム改革に取り組むこと、併せてその土台となる意識改革を強力に推進することが不可欠である。

とりわけ、同質性の高い社会で比較的閉鎖的な人間関係を前提としてきた日本では、人と人がとり結ぶ関係のつくり方において、いわば「甘えがある。積極的に合理的に、異質なものに対してもぶつかっていくつもりで人間関係を構築したり社会に関わっていく」とする力が弱い。

2030年は実はそう遠い未来ではない。遡ること16年前の1998年前後と今を比較してみると、社会が大きく変化したとは言えない。意識の変わり方、遅い。我々が抱えて

いる課題解決のために、具体的にどう対策を講じていくかという問題とは別に、意識のあり方をもっと加速をつけて変えていかなければいけないのではないかと危惧している。異質なものと触れ合い、ぶつかり合いながら構築することも重要な

であるが、地域社会を再構築し、身近な人間関係でうまくカバーできる部分が出てくれば、介護の負担がある程度軽減できるようになるのではないかと。今後、そういう変化を生み出す担い手として期待しているのが、新しいエリート、日本

最大の効果を上げられる人を指す。しかし、これからの社会で求められるエリート・中核層とは、今あるシステムを疑い、より良いものはないかと、社会の力を借りながら新たな価値を創り出している人たちである。社会とは間違った。しかし、課題があってもいい、では人の意識は変わらない。20年、30年先の日本社会はこうあってほしいと、夢を共有できるような旗を掲げて、それに向けて頑張ろうというメッセージがいろいろところから発せられ、そこにエリート・中核層が動き回って皆を刺激すれば、社会変革が起きる可能性が出てくるのではないかと。旗を掲げるリーダーはもちろん、エリート・中核層と言われる人たちがくじけないことが大切で、変革への執念を持つ層をどれだけ広げていけるかが問われている。

日本が世界の中で存在感を発揮していく上で大事なのは、多様な世界の力を受容しながら日本社会の良さを再生産していくことで、日本の歴史を振り返っても、日本人にはそれができるはずだと確信している。しかし、残念ながら我々に一番欠如しているのが「自信」「誇り」である。

本学のFLYプログラム（大学入学直後の一年間を休学し、学生が自主的に計画した社会貢献、就業・海外体験などを行うプログラム）の報告会でも、「自分にこれだけの力があるとは思わなかった」との発言が相次いだ。が、異質なものと触れ合わない限り、自分が本当にどれだけの価値があるのかということにはわからない。

小手先ではどうにもならない、そういう意識の変化の先に日本の未来があるのではないだろうか。（談）

（日本アカデミア・長期ビジョン研究会「社会構造研究」グループ共同座長）